

卷頭言

革命家・永戸 祐三

富沢 賢治（協同総研顧問）

今や革命家という言葉は死語になっているのかもしれないが、私にとって永戸祐三さんは何よりも革命家であった。私が知り合えた人のなかで革命家が3人いる。中西五洲さん、菅野正純さん、そして永戸祐三さんである。3人とも労働者協同組合の活動家であり、3人とも鬼籍の人となった。生き残った私としては、できるだけ彼らの足跡を残したい。本稿ではとくに永戸さんとの個人的交流を語り、若干の記録としたい。

1980年に一橋大学教職員組合の執行委員長に選出されて以来、私は全国的な労働組合の活動家たちと会う機会が増えた。1984年に私を中高年雇用・福祉事業団の運動に導いてくれたのは、労働旬報社の編集者、飯島信吾さんであった。当時私は社会変革の基軸は、協同労働の社会化であり、その観点から労働組合運動も協同労働の問題に取り組むべきだと主張していた（『唯物史観と労働運動』1974年、「労働組合運動の新しい理念——『高賃金』から『人づくり』へ」1984年、など）。飯島さんは、富沢の見解は夢想ではなく、すでに日本で中高年雇用・福祉事業団が実行していると言って、私を中西五洲さんに紹介してくれた。

それ以降、私は労働者協同組合運動に

のめりこんでいき、菅野正純さんと永戸さんとも知り合うことになった。日本の労働者協同運動の礎を築いたリーダーである中西さんを若手の活動家である理論派・菅野さんと組織者・永戸さんが支えるフォーメーションは、鉄壁の三角形のように見えた。

1981年、全日自労建設一般労働組合（全日自労）の中央執行委員に選ばれ、事業団を担当することになった永戸さんは、当初「いやだなあ」と思ったそうである。「事業、商売というものは金もうけのためのものだ。運動をゆがめる因だ」と決めつけていたからである。ところが、事業団づくりを全日自労の闘争の本流に位置付けることが決定されたこともあり、「労働運動史上、画期的な存在としてある全日自労を助けるためだったら、やれといわれた事業団運動をやらなければいけない」と永戸さんは腹を固めたそうである（永戸祐三『協同労働がつくる新しい社会』124-125ページ）。

1989年には日本協同組合学会（訳編）『西暦2000年における協同組合』（富沢監訳）が刊行された。この通称『レイドロー報告』は労働者協同組合運動の重要性を強調したことで世界的に注目された。とりわけ、「（産業革命以降）資本が労働を

雇うようになった。ところが労働者協同組合はその関係を逆転させる。つまり労働が資本を雇うようになる」という一文は、革命家永戸さんの心を驚愕にして、彼の座右の銘のようなものになった。

永戸さんは、自他とも認めるように、人を心から感動させる(いい意味での)アジテーターであった。彼は人をひきつける魔力を持っていた。

私は永戸さんともに北海道に行き労働者協同組合運動のオルグ活動をしたことある。会場への雪道で彼は歓声を挙げて子犬のように雪の上を飛び跳ねていた。無邪気な彼の姿が映画の一場面のように今でも私の脳裏を離れない。会場に着くと彼は労働者協同組合運動について熱弁をふるった。会衆は前のめりになって話を聞いた。

永戸さんと私はときには食い違うこともあった。

「協同労働」という言葉は労協が生み出した独自のコンセプトである、と語られることが一時期あった。この言葉がいつ使われ始めたのか、永戸さんに問うたことがある。彼が菅野さんに「我々のやっていることは何か」と問うたとき、菅野さんは「協同労働だ」と簡潔に答えたそうである。

「協同労働」を労協の特許品のように喧伝すると外部からの批判を招くと懸念した私は、「協同労働というコンセプト——その国際的・歴史的普遍性」(『協同の發見』2013年10月)という論稿を書いた。「読むように永戸さんに伝えてほし

い」と編集者に頼んだが、果たして彼が読んでくれたかどうか不明である。

学生時代に大学紛争を果敢に闘った永戸さんは大学教授なるものをだいたい信用していなかったように思う。2010年代に私が協同組合全体のナショナルセンターづくり運動に熱中していた時、永戸さんがそれを批判しているという話を伝え聞いた。生協にしろ農協にしろ協同組合のリーダーたちは自分たちの組織の強化に手いっぱいだから、ナショナルセンターづくりの運動は徒労に終わる、無駄なことはよしたほうがいい、という批判のようであった。私は早速彼の事務所に行き、「批判するのはいいが、反対運動は組織しないでくれ」と文句を言った。彼は、ただニヤニヤと笑うだけで相手にしなかった。しかし私としては彼の顔を見るだけで彼の心を十分に理解した。

協同総合研究所の一つの使命は実践家と理論家との連携によって労働者協同組合運動の強化を図ることである。実践家と理論家との連携は、時には食い違うが、長い目で見るとどこかで結びあっているのではなかろうか。

永戸さんの最大の功績は運動の跡継ぎを育てたことだ。彼は人育てが上手であった。彼のやり方を見ると、労協運動は、金をつくる運動ではなく、人をつくる運動だと思えてくる。彼は、金は残さなかつたが、人を残した。これこそ革命家の一大事業ではないだろうか。永戸さんはやりたいことをやって世を去ったように思う。